



広報

京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻
 京都大学医学部人間健康科学科



左から小森悟工学研究科長、谷口栄一ユニット長、光山正雄医学研究科長

目 次

○健康	人間健康科学系専攻長 坪山 直生…………… 2	安寧の都市ユニット	特定助教 高槻 玲…………… 11
		看護科学コース	助手 竹之内沙弥香…………… 12
○「安寧の都市」ユニットについて	副ユニット長 野本 慎一…………… 3	○医学部人間健康科学科新入生合宿研修	学生厚生支援委員会委員長 二木 淑子…………… 13
○退任等挨拶	リハビリテーション科学コース（作業療法学講座） 助教 白井はる奈…………… 5	○人間健康科学系専攻・人間健康科学科	入学試験結果及び修了・卒業者数…………… 14
	リハビリテーション科学コース（作業療法学講座） 助教 東海林美希子…………… 6	○人事異動……………	16
○新任等挨拶	安寧の都市ユニット	○日 誌……………	17
	特定准教授 三谷 智子…………… 7	○あとがき……………	18
	看護科学コース 講師 金岡 緑…………… 8		
	看護科学コース 講師 大倉 美佳…………… 9		
	看護科学コース 助教 内海 桃絵…………… 10		

健 康

人間健康科学系専攻長 坪山直生

私たち人間健康科学系専攻は、「できるだけ多くの人々にできるだけ高度の健康を届ける」という共通の目標のもとに、研究・教育活動を展開している。では届けるべき「健康」とは何なのか。

世界保健機構は（WHO）1946年、「健康とは身体的・精神的・社会的に完全に良好な状態にあることをいう」と謳いあげた。この理想主義に基づく定義は本来あるべき姿を示すものとして、今も生きている。

一方でこれを唯一の定義と考えると、現実には多くの人が健康ではありえないことになる。私を含め、何か一つくらい不具合を持っている人が多いだろう。では私は健康なのか、健康ではないのか？

健康をより相対的に捉える考え方がある。人間と環境の関係性、人間が環境に適応していく過程と能力を重要視する考え（デュポス）、自己の可能性の最大限の発揮に向けて、統合的に機能する動的状態のことだとする見方（ダン）などであり、荒っぽくいってしまえば日野原重明先生の「病気をもっていても、こころが健康でさわやかさを感じることができれば、その人は健康であるといえます」というお言葉もこの系譜にあるのかもしれない。

健康の相対性に加え、その座標軸を1本とせず、プロファイル的・三次元的に捉えるモデルも多い。「臨床モデル」「役割遂行モデル」「適応モデル」「幸福論モデル」の4つの尺度（スミス）、「状態としての健康」「価値としての健康」「自己実現としての健康」というカテゴリー（小泉明）など、まだまだあるはずだ。

では私たちはどうすればよいのか。一方でWHOの理想を捨ててしまうこと無く、実際には現実の人間、現実の社会をそれぞれの特質に合わ

せてより良い状態に持って行く、あるいはその動きのためのモメンタムを与えることを目標にし、そのためには何を見出し、あるいは何を実践すべきかを探求するということだろうか。「個性」「柔軟性」が重視される所以である。

私たちは時にはふと立ち止まって「健康とは？」の問いに思いを致すべきだろう。私自身の認識が十分とは思っていない。この拙文をお読みになって、何かお考えがおありの方はご教示をお願いしたい。

— 「安寧の都市」をつくる高度融合型人材教育ユニット支援事業 — 「安寧の都市」ユニットについて

安寧の都市ユニット 副ユニット長 野 本 慎 一

人類の歴史を振り返っても、そもそも「都市」というものは商業・工業の中心地として繁栄してきたものであり、ピラミッド型人口分布を保った人口増加に依存して発展してきた。しかしながら、わが国が直面している人口減少を伴う少子高齢社会は有史以来未曾有のものであり、現在も地方都市ではシャッター街といわれる中心市街地の空洞化現象や公立病院の縮小、廃止などの医療崩壊といわれる現象が進行している。世界をみても、地球温暖化に伴う環境の変化、地震・洪水などの自然災害の増加、新型インフルエンザをはじめとするパンデミックなど未だ嘗て経験したことのないような複合的諸問題が発生している。

そのような諸問題に対処し、人々が生き生きと安心して暮らしていける社会を構築していくには、従来工学的観点からのみ考えられていた住まわちそのものを、医学・生理学的アプローチを融合させた新しい観点から考えなおしていかなければならない時代となってきた。

教育プログラム「安寧の都市ユニット」は、そのような都市のあるべき姿を確立し、それを実践できる人材を育成し、人間健康科学と都市系工学を融合した「人間健康都市科学」を創成することを目指している。医学と工学の融合とはいっても、医学医療の専門家と都市工学の専門家の単なる寄せ集めではなく、このユニットが目指しているのは、受講者が新たな視点で「安寧の都市」をイメージできる研究と教育の拠点である。

このユニットは笹田昌孝前専攻長在任中から構想・計画され、この平成22年度より5カ年をかけて実施されることになった。今回、工学研究科谷口栄一教授をユニット長として、新たに医学研究科人間健康科学系専攻に2名（特定准教授1名、特定助教1名）、工学研究科に4名（特定教授1名、特定准教授3名）計6名の教員が採用された。医学研究科拠点を人間健康科学系専攻内の杉浦地域医療研究センター内に置き、工学研究科拠点を桂キャンパスCクラスターに設置した。

このユニットはおもに自然・人為災害に対するリスクマネジメントや災害時医療体制整備のための支援技術などの教育・研究を行う「クライシスマネジメント部門」と、環境・景観計画や健康都市計画、および交通計画など、安心・安全な都市を創るための実践的な教育・研究を行う「アーバンアメニティ部門」から構成されている。1年間かけて所定の単位を取得すれば、理想的な安寧の都市を構想し、政策企画・提言・実施できるリーダー、つまり「安寧の都市クリエイター」が輩出される。

カリキュラムとしては、基礎エッセンスの集中教育、融合研究と実践的な演習に加え、地方自治体、病院、保健所、公共交通機関、企業などと連携共同して行う、フィールドワークを中心とする問題発見型教

育や地域プロジェクト提案を行う創造型教育を特徴としている。具体的には、工学研究科・医学研究科2部門の融合したこのユニットの共通理念を紹介する共通基礎科目「安寧の都市デザイン」をはじめ、「基礎科目」17科目、「セミナー科目」1科目、さらに医学・工学が融合して新たな研究テーマに発展する内容を扱う「共通発展科目」2科目、実践プロジェクトを対象として、提案創造型のデザイン教育や臨地教育を行う「実践プロジェクト型科目」が用意されている。

各年度後期より履修を開始し、1年間で終了する。所定の単位を修得すればプログラム修了認定証（安寧の都市クリエイター修了認定証）が与えられる。さらに、実践的な教育の場や新学問領域の創成に向けた議論の場として、随時公開セミナーやシンポジウム等を開催することになっている。

これらの教育を通じて、多様な地域主体とともに解決すべき課題を理解し、総合的な判断と適切な対処方策を実践的に提案実行できる人材「安寧の都市クリエイター」を地域レベルで育成するとともに、人間健康科学と都市系工学を融合した新学問領域「人間健康都市科学」の創成を目指している。





退職のご挨拶

元リハビリテーション科学コース 助教 白井 はる奈

本年3月末日付で京都大学を退職いたしました。京都大学には3年間お世話になり、教職員の皆さまから沢山のことを学ばせて頂き、幸せな時を過ごさせて頂いたことに心より御礼申し上げます。

私は平成9年に京都大学医療技術短期大学部作業療法学科を卒業し、済生会中津病院、広島大学、京大病院デイケア診療部を経て、平成19年4月に人間健康科学系専攻に着任いたしました。

在職させて頂いた3年の間には、1期生の卒業、修士課程の開設、博士課程の開設という、人間健康科学系専攻にとっての歴史的出来事が目白押しでした。耐震工事のための引っ越し作業、避難所（作業療法学専攻・松林先生命名）での生活、教文センターや芝蘭会館での授業も今となっては懐かしい思い出です。避難所では工事の騒音をBGMに（?!）、作業療法学専攻のほとんどの教員が同じ部屋に集まり、机を並べてお仕事させて頂いたため、先生方の背中を見て学ばせて頂くことが多くありました。

授業は作業学・日常生活援助法・高齢期作業治療学を主に担当していましたが、何度経験しても緊張し、教室に向かう廊下を歩きながらいつもドキドキしていました。学生の時は、先生方が1コマ講義されるのに、その何倍もの時間を講義準備に費やしておられるなど思ってもみませんでした。学生との様々なディスカッションは刺激的で、教育は“共”育であることを実感しました。何年経っても今の気持ちを忘れず、学生と共に学びあえる教員でありたいと思います。

実習地訪問や実習指導者会議では、私が学生時代にお世話になった作業療法士の先生方にお会いすることが、懐かしくもあり、少々恥ずかしくもありました。十数年前、学生の時には、まさか自分が母校の教員になろうとは想像さえしませんでした。

したが、様々なご縁で、多くの方々のお力添えのお陰で今の自分があることに感謝いたします。

在職中は京大の同窓会である紫緑会のお仕事にも少し関わらせて頂きました。今までは毎年郵送されてくる「紫緑会だより」と作業療法支部の「ゆりの木通信」を何気なく読んでおりましたが、卒業生の役員の皆さんがボランティアで運営して下さっているからこそ、毎年滞りなく発行されていることを目の当たりにしました。広報委員会では、「What is Health ?」というテーマで、トップアスリートとして長きにわたってご活躍されている寺尾悟選手（スピードスケート五輪選手）にインタビューさせて頂くという、貴重な経験をさせて頂きました。「健康とは心が満たされていること」と答えられたのが印象的でした。

色々な事業（実習も、研究も、紫緑会も、広報誌も、市民公開講座も…）が、多くの方々の力が集結してできた賜物であることを再認識した3年間であり、気持ちよく利他の行為を行うことの大切さを皆さまから学ばせて頂きました。

この4月からは佛教大学に勤務しております。名前の通り、仏教を建学の精神とする大学で、2012年には開学100周年を迎えます。京大とは規模も文化もシステムも違いますが、これまでの経験を礎に、微力ながら自分が社会のためにさせて頂けることは何かを考えながら、新たな環境でも精進していきたいと思います。来春には佛教大学の保健医療技術学部が二条キャンパスに移転する予定です。京大との距離も近くなりますので、いい連携をさせて頂ければ幸いです。今後ともご指導よろしくお願いいたします。

最後になりましたが、皆様のご健康とご多幸を、そして、人間健康科学系専攻の益々のご発展をお祈りしております。

退職のご挨拶

元リハビリテーション科学コース 助教 東海林 美希子

障害児療育の現場での経験を、検証・整理・表現できればと願って就任いたしました。思いもかけず、こんなに早く退職させていただくことになりました。

いきなり私ごとで失礼いたしますが、重い障がいを持つ子どもの母となりました。「医療的ケア」を日々行いながら、自宅で生活しています。今までは作業療法士として子どもたちに関わってきましたが、今度は親の立場となりました。

事故が起きるとは予想もせず、赤ん坊との出会いを楽しみに臨んだ出産でしたので、子どもが仮死状態で生まれたことによる混乱は深いものでした。ICFでは、生活機能と障害の構成要素を「心身機能・身体構造」、「活動」、「参加」としております。わが子の障がいを前に、悲しみや混乱は、時間的にはこの順番でやってきたように思います。呼吸もままならず、途絶えそうな命と身体的苦しみを見守る悲しさ。子どもを抱いたり授乳したり、木々の緑や風のそよぎを感じさせてやれない焦り。そして、仕事をはじめ、私自身の多くの社会的活動を見直す葛藤……。その中で、多くの医療専門職の方々と出会い、支えていただきました。適格な医療的判断や技術はもちろん、まだ何も表現できない赤ん坊の内面世界にも気持ちを向け、支えようと関わってもらえた時、親としては非常に救われました。

基本的な生命機能の障がいも重く、特定機能病院でお世話になった期間が長かったこともあって、「活動」「参加」に対する支援はなかなか得られず、親である私はかなりジタバタいたしました。生命機能の障がいも重くても、重いからこそ、与えられた一日一日を大切に過ごすため、家族としては「活動」に対する援助を切望しました。その過程で、

健康人間学部の先生方にも相談に乗っていただき、私は非常に恵まれていました。

また、医療的ケアを必要とする子どもや家族の社会参加を支える資源がいかに乏しいかを、改めて知りました。退院後の日々の生活を回すための最低限の支援を得るためだけでも、行政や民間の相談機関を迷い歩きました。ここでも又、先生方にお世話になりました。

親として改めて、「障がいと共生しながら質の高い生活を支援する健康科学」の大切さを実感いたしました。そして、そのような支援が、現在の日本ではまだなかなか得難いものであることも実感しました。

当面私の作業療法士としての活動は細々したものとなりそうですが、子どもを通しての気づきを、世の中に返すことができると願っております。

短い在职期間中、先生方、職員の方々には本当にお世話になりました。十分にご挨拶もできないまま退職してしまい、心苦しく思っております。本当にありがとうございました。



着任のご挨拶

安寧の都市ユニット 特定准教授 三谷 智子

はじめまして。三谷智子（みにとこ）と申します。平成22年5月1日付で安寧の都市ユニットの特定准教授として赴任してまいりました。

私が研究者の世界に入りましたのは、京都大学の防災研究所巨大災害研究センターからです。災害心理学から災害ストレスの研究をしておりました。その後、京都大学医学研究科社会健康医学系で疫学を学びました。

前職は、鴨川を挟んだ向こう岸にある京都府立医科大学です。医学研究科地域保健医療疫学分野という講座で助教をしておりました。医学部3年生の公衆衛生学の授業と4年生の保健所実習、研究配属などを、教室の先生方と分担して担当しておりました。またJapan Multi-Institutional Collaborate Cohort (J-MICC) Studyにも教室をあげて取り組んでまいりました。尊敬できる多くの疫学研究者に囲まれ、自分もいつか自分のことを「(災害)疫学者」と言えるようになろうと日々精進してきました。

この度御縁を得て、再び京都大学の門をくぐることになり、身の引き締まる思いです。「安心・安全の町」の視点から「災害医療」「災害疫学」の教育、研究に組みたいというのは、私の積年の願いでした。「安寧の都市ユニット」で仕事をさせていただけるのは、今でも信じられないくらいで、心からありがたく思っております。

多くの人にそうであるように、私にとっても阪神淡路大震災は大きな出来事でした。「災害のために、悲しい思いをする人を一人でも減らしたい」という思いが私の研究者としての原点にあると思います。日本は、世界中で唯一、あらゆる種類の災害を経験している国で、災害の頻度も高い国です。私たちの研究成果がアジアや世界中の人々の

お役に立てるように、ここ京都大学から発信していきたいと思っています。

と、大風呂敷を広げましたが、私個人のパーソナリティは「コテコテの大阪の姉ちゃん(おばちゃん?)」です。「売れない芸人」みたいに「ボケて笑いを取りたい」、「どうしたらウケルか？」などを常に考えています。皆様にかわいがっていただきたいと思っております(と言えほど、「かわいい年!」ではないですが)。杉浦地域医療研究センターの「安寧の都市ユニット・医学研究科拠点」の部屋におりますので、情報交換、意見交換にお立ち寄りください。どうぞよろしくお願いいたします。

着任のご挨拶

看護科学コース 講師 金岡 緑

平成22年4月に着任いたしました金岡 緑（かなおか みどり）です。宜しく御願い致します。これまで、助産師としての臨床経験を経て、臨床での課題をもとにリサーチマインドが芽生え、母性看護学・助産学の教育・研究に従事してきました。健康福祉学・健康生態学研究を学び、Women's health ecology の視点で看護と環境、特に看護者と対象との相互作用に軸足を置いた研究・教育活動を展開しています。具体的には、妊産褥婦とその家族に対して豊かな出産・育児経験を支援することを目的とし、女性の健康を規定する要因に関する研究と、女性の健康を支援する看護職に関する研究を行っています。

前者においては、レジリエンスを引き出す援助の展開をめざしています。実践家と研究者の協働プロセスにとどまらず、看護の対象となる女性を巻き込んだのミューチュアル・アクションリサーチを考えることで、臨床での状況をタイムラインで確認し問題や現象を確定し、今まで行ってきた育児に関する研究の客観性を保証していきたいと考えています。

一方、後者では「母性看護・助産実践能力向上のための教育方法の開発」が現在の主要なテーマとなっています。そのきっかけは、母性看護学実習前の学生からの不安の訴えでした。母性看護実践能力に対する学生自身の実施可能か否かの自覚と確認については、主観的な判断にゆだねられる点が大きく、実習開始前の不安を改善するには至りません。現在の技術演習はシミュレーターの演習が主流で、母子とその家族の存在を感じ、自分の技術を客観的に評価したり、演習中や演習後に他者評価を受けることは困難です。また、現行の評価基準に基づいた技能評価を実施する場合でも、

評価に影響を及ぼす評価基準外の学習者の反応の捉え方や、評価基準の理解度と評価の重み付け等は、学生・教員個々により視点が異なります。従って、学生個人や対象理解に根ざした学習教材の標準化と看護アセスメント能力の評価手段の検討が急務と考え、実習前段階で臨床場面のシミュレーションを実施し、ケアの意味を包含した母性看護・助産実践能力の向上をめざしています。

実は、このような考えに至った経緯は、専門職の枠にとらわれすぎずに、自分が何者であるのかを探求すること、経験知を自身のことばに置き換えようとする原動力がなければ、何もはじまらない、その第一歩が、人とのかわりに関心を寄せていくことだと、学生時代、京都大学で助産学を学ぶ中で教わってきたことです。まずは、看護者が自己表現する勇気をもつことが、母子とその家族の自己表現を支えるための創造力を高めること、支援することと同時に自分自身の成長につながることを実感できた貴重な1年間でした。学生自らが課題を発見し改善策を検討する新しい評価法を検討する上で、まずは、対象への関心に根ざした「わくわく・ドキドキ・楽しみな」感覚をみなさんに伝えたいと思っています。

着任のご挨拶

看護科学コース 講師 大倉 美佳

京都大学の敷地に足を踏み入れてから、あっという間に月日が流れ、もう2か月が経ちました。人間健康科学科の建物内の場所さえまだ定かでない状態で十字路の廊下で立ち止まり右だったか左だったかと悩みつつ歩いています。そして、開かずの扉と思っていた部屋があったのですが最近やっとキーロックの解除方法が分かったという情けない段階です。まして吉田の広いキャンパスには、まだ数回しか行ったことがないのです。それもいつも誰かに連れってもらっている状態。ああ、これで地域看護学の教員と言っているのだろうか、と自問自答の日々です。

京都に行ったら、美味しいおばんざいのお店を見つけにして、ちょっとおしゃれな喫茶店で憩い、優雅に過ごそう、なんてはかない夢でした。(食べることはすっかり優先の夢ですが…)

結局、三重から京都まで片道1時間半のほとんどを高速道路での通勤に費やし、帰り道途中の南禅寺の桜道を眺めたのが、今のところ唯一の京都観光(?)です。とはいえ、その時も手をつないで歩くカップルや楽しそうに観光している外国人を横目に、羨ましさのあまりによだれがでるしまつ。

愚痴ばかりの2か月ではないことを書き留めておきます。目下の楽しみは講義です。講義までの準備はいつも自転車操業で火の車ですが、学生さんたちの反応が楽しみでワクワクします。講義当日にダイレクトに反応してくれることは少ないのですが、講義後に毎回書いてもらっている省察用紙への記載がすごいんです。何がすごいって、拙い私の講義内容からしっかりいろんな情報や知識をつなぎ合わせ、文章化するのが上手な学生さんたちが多いんです。さすが天下の京大生、って思います。何より感心するのは、地域看護の対象

になる様々な地域の人々のこと(赤ちゃんからお年寄りまで、そして元気だと思っている人から障がいをもっている人まで幅広い人々の暮らしや生き方)を想像してくれる力がすごいんです。どう接すればいいのか、どう考えていけばいいのだろうかと悩んでくれて、そして自分は家族や周りの方々に愛されてこれまで育ててきてもらえたのだと振り返ってくれたりしているんです。すぐに回答がでない問いばかり投げているのに、そこに向き合おうとしてくれる、そんな風に感じさせてもらえる学生さんたちに出会える喜びは、教員冥利に尽きるってことだろうなと痛感させてもらえる日々を過ごしています。

後期は実習が始まるので、もっと楽しみが増えそうです。実習巡回、地区踏査と称しながら、京都を散策して京都の魅力をもっともっと知りたと思っています。そしてその情報や知識を来年度の講義・演習・実習につなげていきたいと思えます。

まだまだ教員としても京都人としても駆け出しのひよっこですが、温かく見守っていただけると幸いです。そして、ぜひ美味しいお店を紹介して下さい。



新任のご挨拶

看護科学コース 助教 内海 桃 絵

4月より看護学専攻基礎看護学講座の助教を務めさせていただくこととなりました内海桃絵と申します。

主に神奈川県藤沢市で育ちました。父の仕事の関係で、小学校は東京→マレーシア→神奈川→沖縄と4回変わりました。京都は初めてですが、通勤で見る鴨川の景色はすばらしく、毎日元気もらっています。豊かな自然と四季の移り変わりを楽しみたいと思っています。来た当初は、自転車の多さとスピードに驚きましたが、今は私も自転車を愛用しています。自転車でいろいろな所に出かけ、京都の良さを発見していきたいと思っています。

私は、聖路加看護大学を卒業後、聖路加国際病院の画像診断部（血管造影検査の介助など）、一般外科病棟で看護師として勤務しました。その間に、病院のInfection Control Practitioner（最近ではInfection Preventionistというようです）のもとで感染管理活動をする機会がありました。夜勤明けや休日を利用しての活動で大変なこともありました。疫学的なものの方や解析手法を学び、サーベイランスや感染予防教育などを実践することは楽しかったです。

その後、日本看護協会神戸研修センターで、感染管理認定看護師教育課程の立ち上げと運営、教育に携わりました。それまでは、勤務していた病院の中だけの活動で満足し、看護界の動きなどにも無頓着だったため、日本全国の病院から感染管理認定看護師を目指して集まった研修生との出会いは刺激的でした。大変な1年でしたが、その時の研修生は、今はそれぞれの現場で活躍し、私の頼れるアドバイザーになってくれています。

教育する立場を経験し、自分の勉強不足を実感したため、大阪大学大学院へ進学しました。大学

院では、カテーテル関連尿路感染症、消化器外科手術を対象とした手術部位感染のリスク因子の検討、尿道カテーテル留置患者のケアに関する質問紙調査、高齢者施設におけるアウトブレイクについてのレビューなどを行いました。感染管理は医療の質保証の一環であり、医療経済にも影響を及ぼします。針刺し対策などの職業感染防止も重要な課題の一つです。今後も感染管理に関する研究に取り組みでいきたいと思っています。

教育者としての経験は少ないですが、学生とともに学び、成長していきたいと思っています。看護師が担うべき役割、必要な技術、期待される能力は広がっています。私が臨床看護師として働いた経験から得た、看護の魅力についても伝えたいと思います。

不慣れなことも多く、至らない点もあるかと思いますが、皆様からのご助言をいただきながら努力してまいります。どうぞよろしくお願いいたします。



新任のご挨拶

安寧の都市ユニット 特定助教 高 槻 玲

平成22年5月1日付けで、安寧の都市ユニット（工学研究科社会基盤工学専攻・都市社会工学専攻と、医学研究科人間健康科学系専攻による医工連携プロジェクト）の特定助教として着任致しました。平成21年4月より、特任・特定研究員（産官学連携）として本学科にお世話になっており、見かけて下さったこともあるかもしれません。改めましてご挨拶申し上げます。

出身は千葉県ですが、母方が京都ということもあり、小さい頃から京都には良く訪れていました。住むようになって一番新鮮なことは、ふと見回すと山に囲まれていることです。関東平野が広がり、県内最高峰が400m程度である千葉県においては、天気が良かつ高い所に登ってやっと見える山が富士山と筑波山程度であったと記憶しています。私も早く山の連なり方で方角が判断できる程に京都に馴染みたいと思っていますが、まだまだのようです。

私は慶応義塾大学の理工学部物理学科において、生物物理という分野に出会い、それから生物・医学的なことと物理・工学的なこととの融合領域で研究をしてきました。私の研究の取りかかりは、“モータータンパク質一分子計測”から始まりました。一つのRNA PolymeraseがDNAを転写する際の動きを光学顕微鏡下で可視化する研究などをしていたのですが、こうしたタンパク質のいわば生体の素子の働きについての研究を通し、その集合体であるヒトの働き、特にヒトの脳の働きを調べてみたいと思うようになりました。

そこで、修士・博士課程では、それぞれ大阪大学大学院の医学系研究科医科学専攻と基礎工学研究科システム人間系専攻に所属し、また神戸にある通信総合研究所関西先端研究センター（現：情

報通信研究機構未来ICT研究センター脳情報グループ）を実際の研究の拠点とし、近赤外分光法や機能的MRIを用いて脳活動を計測することに関する研究を行いました。実際にヒトの脳活動を対象とした測定や、現行の近赤外光脳機能計測装置以上のものを目指してピコ秒パルスレーザと時間分解カメラを応用した新しい計測法の研究等を行いました。現在の研究もこちらの延長線上にあります。

安寧の都市ユニットにおいてはより生理学的な評価等に向けた研究が必要とされますし、教育に関しては私にとって未知の世界が広がっております。本当に至らない点が多々あるとは思いますが、どうぞご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

着任のご挨拶

看護科学コース 助手 竹之内 沙弥香

平成22年6月1日より、臨床看護学講座 成人看護学／生活習慣病看護学分野の助手に着任いたしましたので、ご挨拶申し上げます。

私は看護倫理や、エンド・オブ・ライフ（以下「EOL」）にある患者のケアにたずさわる看護師に対する教育に関する研究を行ってまいりました。EOLケアに興味を持つようになりましたのは、本学の前身である、京都大学医療技術短期大学部（医短）看護学科の学生であった頃、特別講義にて、米国のホスピスやEOLケアについて学んだことがきっかけです。当時は日本ではあまり広く浸透していなかったホスピスやその概念、そこで実践されているケアに大きな魅力を感じました。進路について悩んでおりましたが、恩師に背中を押して頂き、医短を卒業後米国に留学いたしました。

米国では、州立大学の看護学部で看護の専門知識を習得し、カリフォルニア州の看護師免許と保健師の免許を取得いたしました。その後、総合病院でがん看護を経験したあと、憧れのホスピスにて緩和ケアやEOLケアの実践を学びました。わが国では、緩和ケアやEOLケアは、主にがんの患者を対象に提供されることが多いのですが、米国ではEOLにある全ての患者に、質の高いケアが行き届くよう、様々な取り組みがなされていることに感銘を受けました。また、ケアの現場では、様々な倫理的ジレンマに直面しましたが、米国の医療専門職が持つ倫理観に刺激を受け、次第に医療倫理や看護倫理にも興味を持つようになりました。

帰国後は、米国で得た学びや経験をさらに深めるために、本学の社会健康医学系専攻の医療倫理学分野（専門職学位課程から博士課程）に進学しました。大学院では、緩和ケアやEOLケアにた

ずさわる看護師を対象とした倫理教育についての研究から始まり、それらの看護師を対象とした効果的な教育方法の検討や教育プログラムの開発、その評価法についての研究に従事してまいりました。研究の傍ら、出産を機に2年前に退職するまでは、日本バプテスト病院の内科やホスピス病棟、本学医学部附属病院の外来がん診療部にて非常勤看護師として勤務しておりました。

この度縁あって母校の助手として採用して頂きましたことは大変嬉しく、光栄に存じます。まだまだ非力ではありますが、看護を必要とする人々のアドボケートとして、ニーズに応えることのできる看護師を育成するために尽力いたします。そして、学生のキャンパスライフが実り多いものとなり、それぞれの夢に向かって進めるよう、精一杯サポートさせて頂きたいと思っております。同時に、看護の発展に寄与できるような研究活動ができるよう、諸先生方のご支援をいただきながら日々精進いたします。不慣れなことが多く、至らぬ点があるかと存じますが、ご指導賜りますよう何卒よろしくお願い申し上げます。

新入生合宿研修

学生厚生支援委員会委員長
リハビリテーション科学コース 教授 二木 淑子

新入生に対する1泊2日の合宿研修が、「花背山の家」で、行われました。その概要についてご報告致します。

実施概要

- 実施日時：平成22年4月17日（土）～4月18日（日）
- 研修場所：京都市野外活動施設 花背山の家
- 研修目的：①専攻を超えた学生間、及び在学生や教職員との親睦を深める
②ガイダンスにより大学生活へのスムーズな導入を図る
③健康人間学の未来を語り合い、ともに学ぶ者としての協調と自学自律の志を高める
- 参加者： 人間健康科学科 1回生 143名
2～4回生、院生 29名（うち、日帰り2名）
教職員 26名（うち、日帰り7名）
- 研修内容：①専攻の紹介（教員による説明、上回生による専攻別説明）
②野外炊飯（カレー）
③キャンプファイヤー
④スポーツ（綱引き）

研修結果

前年度の合宿研修の日程は、例年より早めて入学式が行われたその週末でしたが、学生の遅い日程にしてほしいという意見を踏まえて、本年度は一昨年までの日程に戻して開催となりました。場所は例年通り、「花背山の家」でした。

今年は例年になく寒い春であったことに加え、研修場所の「花背山の家」は市内よりもかなり気温が低く、野外活動は非常に大変でした。中には、防寒の準備が不十分な学生もあり、事前の連絡が不十分であったことが反省にあらわれました。

しかし、その寒さが厳しい中でも、学生たちは主体的に動き、野外炊飯やレクリエーションを楽しむ姿がみられました。特に、今年実施した綱引きは、教員対学生の対抗戦が行われ、学生が圧勝するなど、学生、教員とも、非常に盛り上がりました。学生からは「団結力が増した」や「予想外に燃えた」などの感想が聞かれました。また、ガイダンスでは、教員からの全体に向けたものと上回生による専攻別のものが行われました。新入生にとっては、上回生の話が聞けたことにより、大学生活に対するイメージができ、非常によかったようです。

合宿全体に対する学生の感想では、「楽しかった」、「他専攻の人と仲良くなれてよかった」というものが多くみられました。この合宿で得た交流やつながりを大事にして、これからの大学生活も、是非とも有意義に過ごしていただきたいと思います。

運営面では、2回生が中心となって、進めていってくれました。前年の反省をもとに計画を立てたかきもあって、1回生からは「スムーズな進行だった」、「盛り上げてくれた」、「親切だった」など、2回生の運営について、よかったという声が多数集まりました。

来年の合宿も、今年度の良かった点や反省を活かし、よりよい合宿になることを期待しています。



平成22年度 医学部人間健康科学科入学者選抜試験結果

専攻・日程		募集人員	志願者数	合格者数	入学者数
看護学専攻	前期	70	143	75	71
検査技術科学専攻	前期	37	81	39	39
理学療法学専攻	前期	18	37	20	19
作業療法学専攻	前期	18	41	21	21
合計		143	302	155	150

平成22年度 医学研究科人間健康科学系専攻（修士課程）
入学者選抜試験結果

コース	募集人員	志願者数	合格者数	入学者数
看護科学コース	18	21 [6]	14 [1]	13 [1]
検査技術科学コース	13	34 [0]	23 [0]	21 [0]
リハビリテーション科学コース (理学療法学講座)	4	12 [1]	6 [1]	6 [1]
リハビリテーション科学コース (作業療法学講座)	4	7 [2]	4 [1]	4 [1]
合計	39	74 [9]	47 [3]	44 [3]

[]の数は、社会人特別選抜(内数)

平成22年度 医学研究科人間健康科学系専攻（博士後期課程）
入学者選抜試験結果

コース	募集人員	志願者数	合格者数	入学者数
看護科学コース	15	3	2	2
検査技術科学コース		4	2	2
リハビリテーション科学コース (理学療法学講座)		2	2	2
リハビリテーション科学コース (作業療法学講座)		6	5	5
合計	15	15	11	11

平成21年度 医学部人間健康科学科卒業生数

専攻	卒業生数
看護学専攻	65
検査技術科学専攻	40
理学療法学専攻	19
作業療法学専攻	13
合計	137

平成20年度より医学部人間健康科学科に改称しています。
平成21年度卒業生は改称前の入学者のため、保健学科としての卒業となります。

平成21年度 医学研究科人間健康科学系専攻（修士課程）修了者数

コース	修了者数
看護科学コース	12
検査技術科学コース	15
リハビリテーション科学コース (理学療法学講座)	9
リハビリテーション科学コース (作業療法学講座)	6
合計	42

人事異動

発令年月日	職名	氏名	所属	異動事由
平成 22. 3.31	助教	白井 はる奈	リハビリテーション科学コース (作業療法学講座)	辞職
22. 3.31	助教	東海林 美希子	リハビリテーション科学コース (作業療法学講座)	辞職
22. 3.31	助手	高原 世津子	リハビリテーション科学コース (作業療法学講座)	任期満了
22. 4. 1	講師	金岡 緑	看護科学コース	採用 (太成学院大学看護学部准教授より)
22. 4. 1	講師	大倉 美佳	看護科学コース	採用 (三重大学看護学部助教より)
22. 4. 1	助教	内海 桃絵	看護科学コース	採用 (大阪大学大学院医学系研究科博士後期課程)
22. 4. 1	特定研究員 (科学技術振興)	近藤 健悟	検査技術科学コース	採用 (筑波大学大学院システム情報工学研究科博士後期課程修了)
22. 4. 1	特定研究員 (厚生科研)	村上 由希	検査技術科学コース	採用 (社団法人日本食品衛生協会リサーチレジデントより)
22. 4. 1	特定研究員 (産官学連携)	高槻 玲	検査技術科学コース	採用 (京都大学大学院医学研究科研究員 (産官学連携) より)
22. 4. 1	教務担当 主任	松井 規至	事務部	転任 (経済学研究科主任 (教務掛) へ)
22. 4. 1	専門員 (人間健康科学 科担当主事)	數井 保博	事務部	転任 (企画部社会連携推進課専門員より)
22. 4. 1	教務担当 主任	瀬戸 美穂	事務部	転任 (文学研究科主任 (第一教務掛) より)
22. 5. 1	特定准教授 (特別教育研究)	三谷 智子	安寧の都市 ユニット	採用 (京都府立医科大学大学院医学研究科助教より)
22. 5. 1	特定助教 (特別教育研究)	高槻 玲	安寧の都市ユニット	採用 (京都大学大学院医学研究科特定研究員 (産官学連携) より)
22. 6. 1	助手	竹之内 沙弥香	看護科学コース	採用 (京都大学大学院医学研究科博士課程)

目 誌

22.1.4 人間健康科学系専攻新年挨拶会	3.17 執行部会議
1.6 執行部会議	3.18 将来計画検討委員会 教員会議 教授会議
1.7 将来計画検討委員会 病院協議会	3.23 修士学位授与式 修了を祝う会
1.13 臨時執行部会議	3.24 卒業式 卒業を祝う会
1.14 医系懇談会 医学部将来計画検討委員会 医学研究科会議・医学教授会	3.25 医学研究科専攻長会議 医学教授会
1.16 大学入試センター試験（～17日）	4.1 医系懇談会 将来計画検討委員会 病院協議会
1.25 博士後期課程（第2次募集）出願書類受理 （～28日） 個別（2次）学力検查出願書類受理 （～2月3日） 五〇会総会（新年会）	4.2 「安寧の都市」ユニット開所式 安寧の都市ユニット運営協議会
1.27 執行部会議	4.6 新入生健康診断 大学院ガイダンス
1.28 将来計画検討委員会 医学研究科専攻長会議 医学研究科会議・医学教授会 教員会議 教授会議	4.7 学部入学式 大学院入学式 学部新入生ガイダンス
1.29 病院西構内消防訓練	4.8 医学部将来計画検討委員会 医学研究科会議・医学教授会
2.3 執行部会議	4.12 第1回「安寧の都市ユニット」公開セミナー
2.4 将来計画検討委員会 病院協議会	4.14 執行部会議
2.8 個別（2次）学力検査第1段階選抜合格者 決定	4.15 将来計画検討委員会 教員会議 教授会議
2.10 医学部将来計画検討委員会 医学研究科会議・医学教授会	4.17 平成22年度新入生合宿研修（花背山の家） （～18日）
2.15 博士後期課程（第2次）入学試験	4.22 医学研究科専攻長会議
2.17 執行部会議	5.6 執行部会議 病院協議会
2.18 将来計画検討委員会 教員会議 教授会議	5.11 安寧の都市ユニット運営協議会
2.22 医学研究科専攻長会議 医学研究科会議・医学教授会	5.13 医学部将来計画検討委員会 教務・教育委員会 医学研究科会議・医学教授会
2.24 博士後期課程（第2次）合格発表	5.19 執行部会議
2.25 個別（2次）学力検査（～26日）	5.20 将来計画検討委員会 教員会議 教授会議
3.3 執行部会議	5.27 医学研究科専攻長会議
3.4 将来計画検討委員会 病院協議会	5.31 第2回「安寧の都市ユニット」公開セミナー
3.9 臨時教授会議 医学部教授会	
3.10 個別（2次）学力検査合格発表	
3.11 医学部将来計画検討委員会 医学研究科会議・医学教授会	

あ と が き

Kindle、iPad等を利用した電子書籍が巷では話題になっています。今まで紙媒体で読むのが当たり前であった書籍、出版物が次々に電子媒体で読めるように変化しています。「広報」においてもこの流れは無縁でなく、「広報」の内容の多くは学科ホームページでも読むことができます。速報性や経済性、広告効果としてインターネットを介した情報は紙媒体に対して圧倒的に有利です。

こうした中、冊子体「広報」の意義はなんでしょう。例えば、「広報」には新しく着任あるいは退職された先生方のページがあります。新任の先生の期待、意気込み、退職される先生の回顧、寂寥感などが記されています。文章からは先生方の人となりが見えます。とにかく、この冊子体

に寄稿された記事はいずれもよく練られた文章がそろっています。同じご挨拶をもしホームページのみに掲載するとしたら、同様の文章をいただけたいでしょうか。

私達にとって、多分、冊子体に文章を寄稿することは、インターネット上に原稿をアップすることとまだまだ同じではないのだと思います。それは冊子という紙媒体の現実存在性、記録保存性、企画編集性などに対する「畏敬」でしょうか。年に1度、こういう冊子体を出版することは、まだまだ意義のあることであると思っています。

広報委員長 高 桑 徹 也

〒606-8507 京都市左京区聖護院川原町53
<http://www.hs.med.kyoto-u.ac.jp/>

